



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集

コスモス

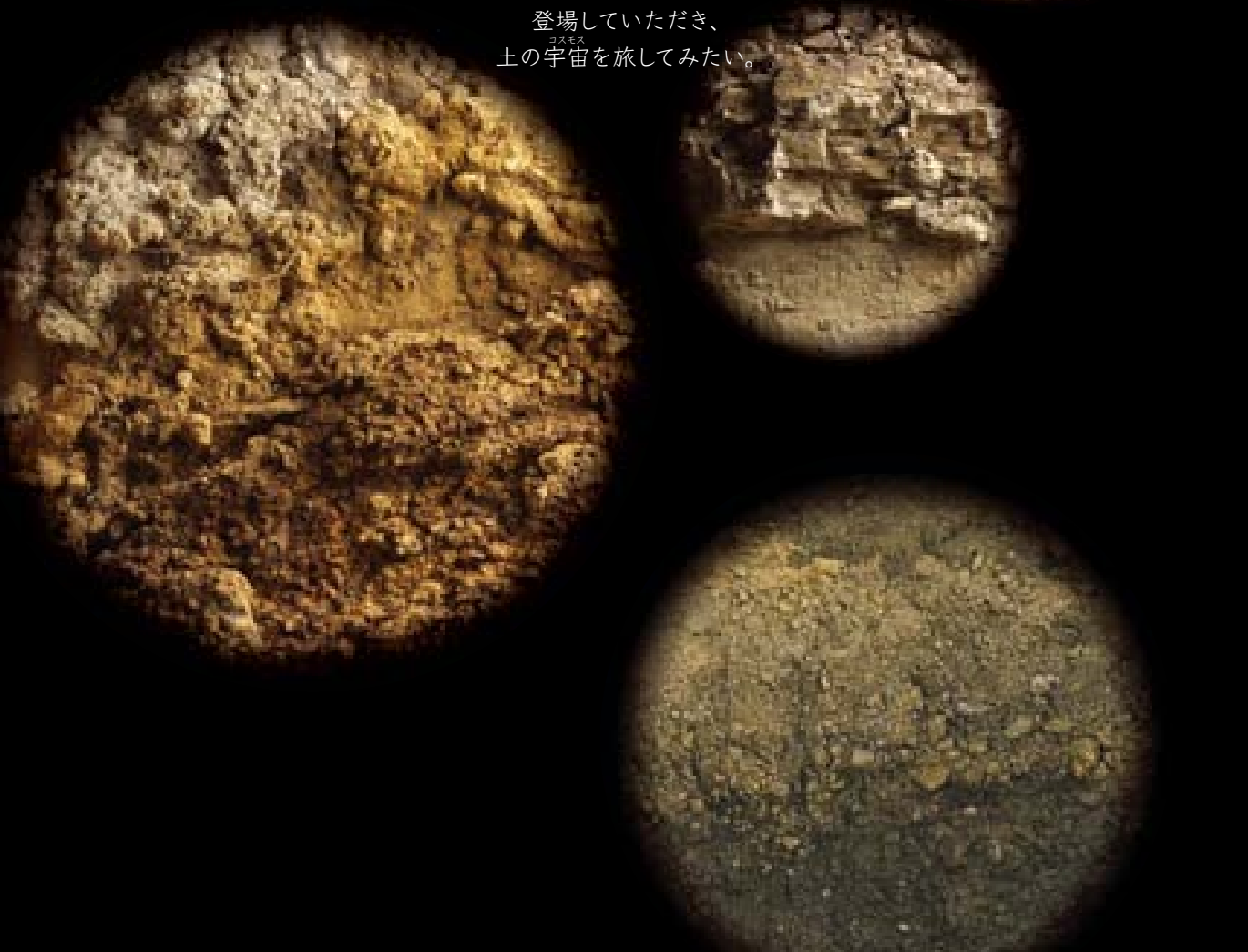
土の宇宙

vol. 08 | 季刊 夏
2008



[特集] コスモス
土の宇宙

「土色」なんて実はない。
土の色は驚くほど多彩なのだ。
土の深さは数メートル。
半径6400kmの地球にとっては
ほんの薄い皮にすぎないけれど
すべての生物の命を育む。
土は、まさに地球そのもの。
土はどうして生まれたのか。
土は何を教えてくれるのか。
土の左官・挾土秀平さんにも
登場していただき、
土の宇宙コスモスを旅してみたい。



[特集] コスモス
土の宇宙

- 02 土 神秘の世界
- 04 土の壁に伝統と未来を塗り込める
挾土秀平さん

LIVE REPORT

- 07 開催報告
[企画展] モノリス・真下の宇宙
—1cm100年の土のプロフィール

[企画展「染付古便器の粋」関連講演会]
染付磁器の魅力—景德鎮から伊万里、そして瀬戸へ 荒川正明

[企画展] やきもの新感覚シリーズ
第70回 小島 修展—陶塊のきらめき
第71回 角倉起美展—祝祭の輝器

LIVE SCHEDULE

- 08 これからの催し

TOPICS

- 09 ミュージアムショップがリニューアルオープンしました！
地元の食材にこだわるピッツェリア「ラ・フォルナーチェ」

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS
LETTER

vol.08 | 季刊夏
2008

表紙写真

咲き誇る花々、日に日に緑を濃くする樹木たち。梅雨の合間の気持ちいい一日。芝生の上に寝ころんだり、水遊びをしたりする人たちもいました。

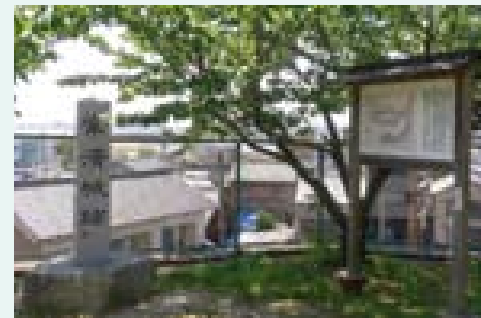
(2008.6.1)

表紙撮影：加藤弘一

常滑から

7

常滑のお城



天正の時代の壺

常滑にもその昔お城がありました。歴史を紐解きますと、文明10年(1480)初代常滑城主水野忠綱が天沢院を開基とあります。天文17年(1548)二代城主水野大和守監物丞は、京で津田宗及の茶の湯に招かれます。

三代城主水野監物守隆は武将として活躍したようです。織田信長の下で浅井・朝倉攻め、伊勢長島の一向一揆攻めには、水軍を率い軍船安宅船で参戦します。また、天正2年(1574)には、連歌師里村紹巴らを招き連歌の会を開くなど文化人としての記録も残っています。

しかし天正10年(1582)本能寺の変の後、明智光秀についたため常滑城を追われます。瀬戸焼を手厚く保護した信長に、海運の利が良い常滑焼は圧力をかけられていたそうです。信長亡き後、常滑焼の発展を願い明智光秀を選んだことが常滑城の不運でした。

磯村 司

(陶業工房工房長
土・どうろんこ館ワークショップ担当)

※ INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

土

神秘の世界

誕生したばかりの地球は、
きっと火星や月と同じように、
岩石で覆われた無機的な世界だったろう。
しかし地球には生命が生まれた。
それらは進化を繰り返し、
約4億4千万年前に海から陸に上がった。
植物が岩石を覆い、長い長い時間をかけて
「土」をつくってきた。

母なる大地

土は、岩石や火山灰など土の元になる母材は、生物と地勢や気候などの風土が作用してできます。それらの組み合わせや影響は地域によって違うため、それぞれの場所ですべて違う土ができるのです。その土の性質が、地域のあり方を決めました。植物を育てる能力が大きいところに文明が発達し、良質な粘土の採れる地域で窯業が発達したのです。

600万年前、中部にあった巨大な「東海湖」に480万年かけて堆積した土は肥沃な濃尾平野の基盤となり、湖の北と南の良質な陶土は日本六古窯の2つ一瀬戸と常滑をつくりました。

土の中

厚さ1cmの土ができる時間は100年から数1000年だといわれます。岩石が風化してきた粘土などに、微生物が植物を分解してつくった「腐植」が加わって生成される時間です。それらは徐々に土の層をつくっていきます。*

土の中は光も音もない、沈黙の世界なのでしょう。

岩石が割れ、ミミズが枯草を食べ、雨が流れ込んでいきます。深部では水や熱が岩石を変化させています。地上とは違う時間の流れのなかで、実はダイナミックな動きのある世界が広がっているのです。

色いろ

土の色は主に、含まれる鉄の化合物と腐植の量や状態で決まります。腐植は黒い色をつくります。鉄化合物の種類や変化の状態によって、土は赤や黄や青になります。また土から鉄化合物が流れ出ると、白や灰色になります。

土の色や粒子の混ざり具合から、土の誕生から現在にいたる「土の記憶」を読み解くことができます。

(監修 農業環境技術研究所)

*土壌学では、地面から岩石までの土層断面を「土の横顔(ソイルプロファイル)」と呼び、この土の断面を採集して作成した標本を「土壌モリス」という。

基本的な土の層は上から、

- ①表面の枯葉などが堆積した層
- ②有機物と土が混ざり成分の一部が抜け出した柔らかい層
- ③上の層からの成分がたまった層
- ④岩石が土になる途中の層

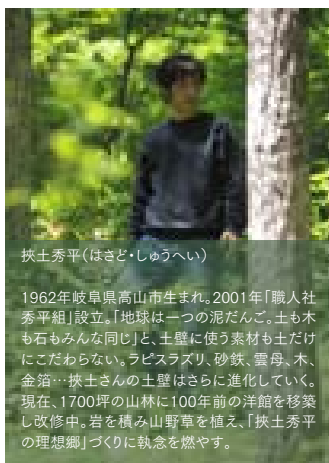


1. 停滞水成土(採取地:北海道紋別市)上部の層は厚く黒味が強い。粘土質の母材のため下部は水の通りが悪く、強い還元状態。
2. ポドゾル性土(採取地:長野県木曾郡大桑村)黒い表層、鉄やアルミニウムが抜けた白い層、それらが移動してきた明るい褐色の層。
3. 黒ぼく土(採取地:鹿児島県南九州市)下部に開闢岳から約1000年前に噴出した多孔質の岩塊が固まった「コラ」がある。
4. 褐色森林土(採取地:愛知県常滑市)下部の粘土質の層は陶土に利用。その上部は水の通りが悪いため鉄が還元されて灰色。



土の壁に伝統と未来を塗り込める 挟土 秀平さん

いま、もっとも注目されている土の左官職人。首相官邸の壁を塗り、ザ・ベニンシユラ東京では、地下1階から地上5階までのらせん階段の壁を塗った。紺色の土に金箔の吹きつけ。夜空に力強く炎が舞い上がるイメージだ。全国から、特に最近では東京からのオフアアが続く挟土秀平さんは「土は宇宙や深海と同じ」と言う。挟土さんにとって「土」とは何か。挟土さんの住む飛騨高山を訪ねた。(取材5月27日)



挟土秀平(はさど・しゅうへい)

1962年岐阜県高山市生まれ、2001年「職人社秀平組」設立。「地球は一つの泥だんご。土も石もみんな同じ」と、土壁に使う素材も土だけにこだわらない。ラピスラズリ、砂鉄、雲母、木、金箔…挟土さんの土壁はさらに進化していく。現在、1700坪の山林に100年前の洋館を移築し改修中。岩を積み山野草を植え、「挟土秀平の理想郷」づくりを執念を燃やす。

挟土秀平さんは秀平組の職人たちと、土を混ぜながら何か相談をしていた。傍らの倉庫の壁には複雑なデザインの壁の試作がしてある。今年7月に開催される北海道洞爺湖サミットのゼロエミッションハウスの壁だという。来訪する人々に見せるため、玉虫厨子^{たまむしあずし}を置く壁だ。

「万葉集に『青丹よし 奈良の都は：』って歌があるでしょ。青丹っていうのは朱と緑。同時代の正倉院があってバックに青丹の気流が流れて、その前に玉虫厨子が立っている」というふうにしたと考えてると、少し照れながら挟土さん。壁の前には挟土さん作・土の磨きテールも置かれる。それも試作品を制作中。春慶塗^{はるけいぬり}の枠の中に赤土の磨きが入っている。

各国のファーストレイディが一堂に会する直径2mの丸テーブルも制作。「大陸は一つだったという大陸移動説を水溜りの風景で表現する。色は、白と水色と浅葱色^{あさぎいろ}の地球」。朱に緑に白に水色に浅葱色一挟土さんの土壁の色は、なんと豊かならう。

*1) 法隆寺に伝わる国宝を平成の名工たちの手で再現、今年3月、同寺に奉納された。
*2) 天然の木目の美しさをそのまま生かす漆器。高山の伝統的工芸品。
*3) わずかに緑色を帯びた薄い青。

あつたかいところ、やさしいところに行きたかった

左官の家の二代目。21歳の時に技能五輪・左官部門で優勝、世界大会に出場という確かな腕前。土と出会い、土と生きると決めるまでは、会社の次期社長として60人の左官の指揮をとり、巨大ビルのセントの壁を次々と手がけた。ふと虚しさを感じ始めたのはいつだったか。土なんか触ったこともなかったが、山に行つて土や木の枝を見つめていると心が和んだ。

「グレーの世界ばかり見てきたから、土の色に惹かれたんだと思う」と、挟土さん。赤い土を集めたら、「こんな色の土が地球にあるんだね」と言ってくれた人がいた。黄色の土を見つけたら、また褒めてもらった。嬉しくて、土を探す。今度は青い土を見つけた。「これは奇跡だよ。きつと地霊を感じられるから、こんな土が探せるんだね」と。嬉しかった。「僕は、あつたかいところ、やさしいところに行きたかったんだ」。

土の色は、夜空の向こうにある無限の宇宙の色

土を見つめるうちに、「本当の土が見えてきた」。絵の具やペンキとは違う色、肌合い、柔らかさ、やさ



ここは「赤深」という地名。赤い土が出る。地名や言い伝えなどから、あたりをうけて山に入る。あとはひたすら歩いて探す。虫が穴を掘るときに出した土が、地下の土の色を教えてくれたこともある。



上：山から採ってきた土。赤・黄・青と色鮮やか。
左：手前の土を篩でふるうと細かい粒子になる(中央)。それに水やスサなどを混ぜ、しばらく寝かせて壁土をつくる(後ろ)。



初めての本格的な土の仕事は、高山にある荏野文庫土蔵修復だった。江戸時代、江戸屋萬蔵という左官がつくった蔵。「すごい腕の持ち主だったのは間違いない。漆喰の面や角に命が宿ってるんだ。壁はたくさん塗ってきたから、僕にはわかる。その人と会話できるくらいわかる。顔は見えないけど(笑)」。

土壁を壊して江戸屋萬蔵の仕事を学ぶ。昔の壁土に水を混ぜて材料の配合を学ぶ。時を超えて左官同士の話をしながら、挟土さんは、コンクリートの世界では味わえない、とても楽しい時を過ごしたにちがいない。そして、江戸の名左官の仕事をきっちりそのまま復元してみせた。

左官の技量と自由な発想

「黙っておれば社長になれるものをと説得したんですが、『会社なんかいらん』と言って…と、当時を知る職人。挟土さんは一人、土の世界に飛び込んだ。(実際には7人の職人が付いてきたが)。

ほぼ同時進行で進んだのが、同市久々野町の土蔵。江戸後期の百姓一揆で打ち首になる農民をかまくまったという歴史を持つ。こちらはおそらく農民だけをつくった。「漆喰の上塗りもなく、土の塊みtainな土蔵。技能的値打ちはどこを見てもないけれど、農民の思いが込もっている。その思いを復元しようと思った」。創建当初の姿ではなく、時を経て土壁が剥がれ落ちたままの姿で土蔵を復元することにした。そこに宿る200年以上の時間を塗り込めて。

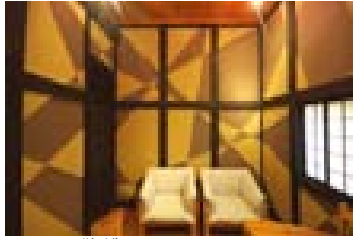
「両極端の2つの土蔵は、左官の技量を示す仕事と自由に発想する仕事があることを教えてくれた」と、挟土さん。挟土さんの土壁が人々を魅了する理由の一つは、「日本の伝統の技」と「未来志向の感性」の両方が、そこにあるからだと思う。

最後に聞いてみた。魂を込めた土で都会の壁を塗りながら、何を伝えたいと思っているのか。

「鉄やガラスやコンクリートがある都会で、土壁を塗っていくでしょ。硬いものは計算できる。でも土は、こうすればこうなると計算できない。僕は、単純な技能でもギリギリのむずかしいところをやりたいわけ。偶然が生む力。それを狙えるのが土なのかもしれない。」



ザ・ベニンシユラ東京の壁
幅7m、高さ28mが2面。夜になると金箔が照明に浮き上がる。照明をどう読むかも重要なポイント。



和菓子処・花筏の土蔵の壁
色の違う土でモダンなデザイン。鋭角の線は、左官の技量を見せる。



荏野文庫土蔵



久々野町土蔵

稲穂の壁 撮影:日暮雄一
朝陽が昇るときと夕日が沈むとき、壁にストライプが現れ、稲穂が浮かび上がるマジックのような壁。5mmもない、わずかな凹凸で表現している。挟土さんの土壁には必ずストリープがある。



それとやさしくなっていくと思う。冷たくて硬い世界から、柔らかくてやさしい世界に挟土さんを導いてくれた土。挟土さんの土の壁は無言のうちに、そんな世界があることを、わたしたちに教えてくれる。

